

人は自分が所属する内集団に対して、自分が所属しない外集団よりも好意的・協力的に行動する傾向を持つ。この内集団ひいき現象は実験室内で些細な基準によって人工的に作られた最小条件集団においても生じることが確認されている。山岸らの研究グループは最小条件集団における内集団ひいきが、自分も相手もお互いがお互いの所属集団を知っている場合（双方向知識条件）にのみ生じ、自分は相手の所属集団を知っていても相手は自分の所属集団を知らない場合（一方向知識条件）には生じないことを繰り返し示してきた。本研究では、この知見が非学生サンプルを用いた場合にも再現されるか、また、そこで生じた内集団ひいき傾向と関連する心理特性を検証した。実験の結果、非学生サンプルにおいても神・山岸（1997）の結果が再現された。また、内集団ひいき傾向と Fear of Negative Evaluation（石川・佐々木・福井, 1992）の程度が正相関したが、Social Dominance Orientation（Sidanius & Pratto, 1999）や Promotion・Prevention focus 傾向（Lockwood, Jordan & Kunda, 2002）などは関連しなかった。これらの結果は、最小条件集団における内集団ひいき行動を間接互惠性への適応行動として解釈する仮説の妥当性を示すものと考えられる。